

パラリンピック競技大会の夜明け

中 川 一 彦

Paralympic Games at the Dawn

NAKAGAWA Kazuhiko

1. はじめに

1989年、国際パラリンピック委員会(International Paralympic Committee, IPC)が誕生し、パラリンピック競技大会は、今、新しい流れの中にある。

IPCは、1960年、イタリア・ローマで開かれた第9回国際ストークマンデビル競技大会を第1回目のパラリンピック競技大会と位置づけ、1996年のアメリカ・アトランタでの大会を第10回パラリンピック競技大会としている。

そこで、本稿では、関係者の一人として、このパラリンピック競技大会の基になった国際ストークマンデビル競技大会(International Stoke Mandeville Games)の発祥からパラリンピック競技大会の誕生、そしてその変遷を辿り、過去を振り返り、21世紀へ向けての課題を探ることを目的とした。

2. パラリンピック競技大会の歴史

1) 国際ストークマンデビル競技大会の誕生

第2次世界大戦後、多くの戦傷者を抱えた国は、彼等に対する身体的訓練、殊にスポーツの医療的活用を目を開き、実際に取り入れていった。

1944年、イギリス・ストークマンデビル病院において導入されたスポーツ活動(図1)は、1948年7月28日、ちょうど第14回オリンピック・ロンドン大会の開会式の日、同病院内で、16人(男14人、女2人)の車椅子使用者によるアーチェリー競技大会へと発展したのである^{6,12)}。

ストークマンデビル病院にスポーツを導入し、アーチェリー競技大会を催したグッドマン(Guttmann L, 1899~1980)は、医師であり、スポー

ツを治療の一手段として導入し、障害者が社会へ再融和するための手段として位置づけていたのである^{5,12)}。

そして、1957年の国際身体障害者福祉協会世界大会におけるグッドマンの講演「身体障害者の更正療育(レハビリテーション)におけるスポーツの重要性」(内藤三郎訳)⁹⁾では、スポーツが“障害に対する勝利”に最もふさわしいものであること、「障害者に関して重要なことは、失ったことなくして残存する能力の如何である」ということを示し、ストークマンデビル競技大会の存在をアピールしたのである。この中では、これだけでなく、「将来のオリンピック・ゲーム——恐らくは次回のローマに於ける大会——にでも身体障害者が各自適のスポーツで競争ができるような特別な分会が設けられるかも知れない。」と記し、「私はレハビリテーションに熱意を持つ人々に切にこの夢が実現されるよう助力されんことを訴えるものである。何となれば、身体障害者をスポーツマンとしてオリンピック・ゲームに彼等の自由な権

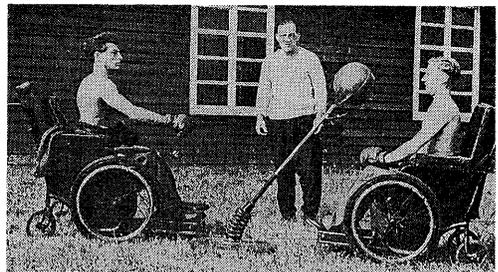


図1 ストーク・マンデビル病院(1944年)におけるスポーツ(パンチボール)
(Guttmann⁶⁾から引用)

利において参加を認めることはわれわれの障害をもつ同胞が社会へ再統合(復帰)を意味する点に於て人類の最も輝かしい偉業の一つにほかならぬからである。」としていたのである。

1948年に始まった大会は、1952年、オランダからの参加を得て国際的規模のものとなり、以来、これを第1回国際ストークマンデビル競技大会と位置づけるようになったのである。

そして、この大会は、1960年、関係者の努力により、第17回オリンピック・ローマ大会の直後に、同じオリンピック施設を使用して開催され、グッドマンの夢実現に一步近づいたのである。

2) 各種障害者スポーツ組織の台頭とパラリンピック競技大会の位置づけ^{1,8,10,15,19,21,22)}

1952年、現在の国際ストークマンデビル車椅子スポーツ連盟(International Stoke Mandeville Wheelchair Sports Federation, ISMWSF)が出来る前、即ち、聴覚障害者のスポーツ組織(Comite International des Sports Silencieux, CISS)は、1924年、第1回世界ろう者競技大会を催していたが、それ以外の障害者スポーツの国際的組織は存在しなかった。

その後、1962年、切断者や視覚障害者を中心とする国際身体障害者スポーツ協会(International Sports Organization for the Disabled, ISOD)が生まれ、1978年脳性麻痺者国際スポーツ・レクリエーション協会(Cerebral Palsy-International Sports and Recreation Association, CP-ISRA)、1981年、ISODから分離独立した国際盲人スポーツ協会(International Blind Sports Association, IBSA)、そして1986年、国際精神障害者スポーツ協会(International Association for the Mentally Handicapped, INAS-FMH)が誕生し、現在に至っている。

一方、1960年、後に「ローマ・パラリンピック」とも表現された第9回国際ストークマンデビル競技大会は、「4年毎にオリンピック競技会が開催される当事国において開催する」という趣旨に添い⁷⁾、1964年、日本・東京、1968年、イスラエル・テルアビブ、1972年、西ドイツ・ハイデンベルグ、1976年、カナダ・トロント、1980年、オランダ・アーヘン、1984年、アメリカ・ニューヨーク(ISMWSFに係わる競技はイギリス・ストークマンデビルで分離開催)、1988年、韓国・ソウル、1992年、スペイン・バルセロナ、そして1996年、

アメリカ・アトランタと引き継がれているのである。

これらのうち、1968年(メキシコ・メキシコシティ、高地であるという医学的理由で)、1980年(ソ連・モスクワ、障害者がいないということで引受け拒否⁴⁾)の大会は、それぞれオリンピック大会の開催当事国での開催ではなかったが、この4年毎の大会は、1976年には切断者と視覚障害者に加え、また、1980年には更に脳性麻痺者を加えた大会として発展してきたのである。

このような動きの中、台頭してきた組織の働きの調整が必須のものとなり、1982年、国際調整機関(International Coordinating Committee, ICC)が出来、IOCとの交流も積極的になり、1984年のオリンピック競技大会では、デモンストレーション種目として、陸上競技、男子1500mと女子800mの車椅子競走が実施されたのである。そして、ニューヨークで行なわれた障害者のスポーツ大会の方では、それまで障害別に実施されるだけだったいくつかの競技(アーチェリー、卓球、ローンボウル)が、障害の枠を越え、障害分類の適用を外し実施され、オープン化を目指し、車椅子のバスケットボールやフェンシングでは、車椅子使用者であれば誰でも出場資格があるとかのように、各種の身体障害者自身が、競技大会を同時に開催するだけでなく、より積極的なインテグレーション(integration, 統合)を自ら求めるようになってきたのである。

しかし、ICCは、既存の障害者スポーツ組織(CISS, ISMWSF, ISOD, IBSA, CP-ISRA、そしてINAS-FMH)によって構成された団体であり、各国が加盟出来ないこと、つまり、各国とICCの関係のあり方に不満・不信感が募り、また、IOCとの関係も密接になる中、組織の乱立に伴う対応のむずかしさをIOC側から指摘され、組織を立て直す必要に迫られていた。

選手自身が、障害分類の適用を外し、オープン化を目指すようになり、障害別ではなく、能力別にクラスを作り、競い合うという考え方は、1988年の大会でも引き継がれ、メダルの価値は、リハビリテーションとして与えられたものから、獲得するものへと意味が変化し、インテグレーションのため、言い換えれば、国際障害者年(1981年)のテーマ「完全参加と平等」のためへと、可能性を追求し、努力し、競争することの大切さが認識さ

れるようになってきたのである。

そこで、1989年、障害者スポーツ組織の一層の団結とオリンピック競技大会を頂点とするスポーツの一元化を指向して、ICCの機構を変更し、世界各国の代表者を含めた障害者のスポーツ組織を作ることになり、その組織をIPC (International Paralympic Committee)としたのである。

そして、IPCは、グッドマンの遺志を継ぎ、1960年の大会を第1回とし、4年毎の大会をパラリンピック競技大会(Paralympic Games)と位置づけるようになったのである。

ところで、パラリンピック(Paralympic)は、1963年の国際ストークマンデビル競技委員会規約にある「“下半身麻痺者”のための競技会である」という目的に添い、対麻痺者を意味する paraplegic、対麻痺の意の paraplegia の“パラ”，あるいは、麻痺を意味する paralysis、麻痺させるという意味の paralyze の“パラ”とオリンピック(Olympic)の“リンピック”をつなぎ合わせたものであり、日本が、1964年の大会で、大会の愛称として用いたものであった。しかし、今では、大会に出場するものが対麻痺者だけではないこと、オリンピックと並んだ、対等の大会でありたいとの願いから、IPCは、IPCのPならびに Paralympic Games の para を parallel の“パラ”に置き換え、今迄通り、Paralympicとして用いているのである。

そして、当初、麻痺者のリハビリテーションに主眼を置いていた大会は、障害者のスポーツ参加を権利として求め、ノーマリゼーション(normalisation, 正常化)、インテグレーションあるいはメインストリーミング(mainstreaming, 主流化)を、そしてインクルージョン(inclusion, 併合)を目指しているのである。

3) パラリンピック競技大会の変遷

10回のパラリンピック競技大会の特色を整理すると、それは以下のものである(表)。

第1回、イタリア・ローマ大会(1960年)

これは、第9回国際ストークマンデビル競技大会として開かれ、21ヶ国、400人の車椅子選手が参加した。

第2回、日本・東京大会(1964年)

これは、第13回国際ストークマンデビル競技大会として開かれ、22ヶ国、390人の車椅子選手が参加した。この大会に際し、日本は、“パラリンピッ

ク”という愛称を大会に付し、パラリンピックの旗、パラリンピックの歌、パラリンピックのポスターなどを作り、リハビリテーションとしてのスポーツの役割を広く啓蒙した。

第3回、イスラエル・テルアビブ大会(1968年)

これは、第17回国際ストークマンデビル競技大会として開かれ、28ヶ国、750人の車椅子選手が参加した。この大会は、メキシコでの大会不開催ということで、ちょうど建国20年に当たる、ユダヤ人グッドマンの望郷の地イスラエルでの大会となった。

第4回、西ドイツ・ハイデルベルグ大会(1972年)

これは、第21回国際ストークマンデビル競技大会として開かれ、43ヶ国、1000人の車椅子選手が参加した。大会会長(Heineman G.大統領)は、スポーツはもちろん各分野における障害者のインテグレーションの必要性について、開会式で力説した。

第5回、カナダ・トロント大会(1976年)

これは、第25回国際ストークマンデビル競技大会部分に、ISODから切断者、視覚障害者も加わり、3群の障害者のスポーツ大会、「身体障害者のための1976年国際オリンピック大会、(1976 Olympiad for the Physically Disabled)」として実施され、40ヶ国、1560人の選手が参加した。

第6回、オランダ・アーヘン大会(1980年)

これは、第29回国際ストークマンデビル競技大会部分に、前回同様、切断者、視覚障害者、そしてCP-ISRAから脳性麻痺者が加わり「1980年障害者のためのオリンピック競技大会、(Olympics for the Disabled 1980)」として実施された。この大会は、ソ連が大会を主催しないということで、アパルトヘイトに熱心だったオランダでの大会となり、42ヶ国、2556人の選手が参加した。

第7回、アメリカ・ニューヨーク大会(1984年)

1982年に結成されたICCが初めて主幹し、「障害者のための1984年国際競技大会、(1984 International Games for the Disabled)」として準備されたが、ISODの関わる切断者等、IBSAの関わる視覚障害者、そしてCP-ISRAの関わる脳性麻痺者の大会部分はニューヨークで、ISMWSFの関わる第33回国際ストークマンデビル競技大会の部分は、イギリス・ストークマンデビルで、財政的な理由から分離開催された。ニューヨーク大会の方には、45ヶ国、1800人が、ストークマンデビル

表 DISABILITY SPORT TIMELINE (Steadward²¹⁾ から引用, 一部改変)

Competition or Event	Year	Organizational Event
First World Games for the Deaf (Silent Games), Paris, France	1924	Formation of CISS
	1925	
	to	
	1943	
	1944	Creation of Spinal Injuries Centre at Stoke Mandeville Hospital
	1945	
	1946	
	1947	
First Stoke Mandeville Games	1948	
First World Winter Games for the Deaf, Austria	1949	
	1950	
	1951	
First International Stoke Mandeville Games	1952	Formation of ISMG
	1953	
	1954	
	1955	
	1956	
	1957	
	1958	
	1959	
First Summer Paralympic Games, Rome, Italy	1960	
	1961	
	1962	Formation of ISOD
	1963	
	1964	
Summer Paralympic Games, Tokyo, Japan	1965	
	1966	
	1967	
Summer Paralympic Games, Tel Aviv, Israel	1968	Founding of International Cerebral Palsy Society
	1969	
	1970	
	1971	
Summer Paralympic Games, Heidelberg, Germany	1972	
	1973	
	1974	
	1975	
Summer Paralympic Games (Torontolympiad), Toronto, Canada / First Winter Paralympic Games, Omskoldsvik, Sweden	1976	
	1977	
	1978	Formation of CP-ISRA
	1979	
	1980	
Summer Paralympic Games, Arnhem, Holland / Winter Paralympic Games, Geilo, Norway	1981	Formation of IBSA
	1982	Formation of ICC
	1983	
Summer Paralympic Games, New York USA & Stoke Mandeville, England / Winter Paralympic Games, Innsbruck, Austria	1984	
DEMONSTRATION EVENTS-Summer Olympics, Los Angeles, USA / Winter Olympics, Sarajevo, Yugoslavia	1985	
DEMONSTRATION EVENT-World Championship in Basketball, Madrid, Spain	1986	Formation of INAS-FMH
DEMONSTRATION EVENT-World Championship in Swimming, Madrid, Spain		CISS and INAS-FMH joined ICC
DEMONSTRATION EVENT-World Championship in Nordic Skiing, Obersdorf, Germany	1987	Arnhem Resolutions passed under the ICC
DEMONSTRATION EVENT-World Championship in Athletic, Rome, Italy		
Summer Paralympic Games, Seoul, Korea / Winter Paralympic Games, Innsbruck, Austria	1988	
DEMONSTRATION EVENT-Wheelchair track events at Seoul Summer Olympic Games		
DEMONSTRATION EVENT-Blind nordic ski event at Calgary Winter Olympic Games		
DEMONSTRATION EVENT-World Championship in Athletics, Tokyo, Japan	1989	Formation of the IPC
	1990	
	1991	
	1992	
Summer Paralympic Games, Barcelona, Spain / Winter Paralympic Games, Albertville, France		
Madrid Paralympic Games (INAS-FMH)		
DEMONSTRATION EVENT-Summer Olympics, Barcelona, Spain		
DEMONSTRATION EVENT-World Championship in Table Tennis, Gothenburg, Germany	1993	
DEMONSTRATION EVENT-World Championship in Athletics, Stuttgart, Germany		
Winter Paralympic Games, Lillehammer, Norway	1994	
DEMONSTRATION EVENT-World Championship in Athletics, Gothenburg, Germany	1995	
Summer Paralympic Games, Atlanta, USA	1996	
	1997	
Winter Paralympic Games, Nagano, Japan	1998	
	1999	
Summer Paralympic Games, Sydney, Australia	2000	

の方には、42ヶ国、1092人、全体で2800人余りの選手が参加した。ニューヨーク大会の開会式では、オリンピック聖火から分けられたパラリンピック聖火が初めて使われ、前述したように、一部の競技では、障害の枠を外したオープン化が導入された。

第8回、韓国・ソウル大会(1988年)

主催国韓国は、ソウル・パラリンピック組織委員会(The Seoul Paralympic Organizing Committee)を創り、ICCと協力し、IOCと全てにおいて連同し、「1988年ソウルパラリンピック競技大会、(1988 Seoul Paralympics)」として大会を運営した。この大会は、ICCの旗の下に脊髄損傷者(ISMWSF)、切断者等(ISOD)、視覚障害者(IBSA)、そして脳性麻痺者(CP-ISRA)の集まる大会となり、61ヶ国、4280人の選手が参加した。

第9回、スペイン・バルセロナ大会(1992年)

この大会は、新しく結成されたIPCが、ICCから引き継ぎ、主幹し、前回同様、IOCと全てにおいて連同し、1992年バルセロナ第9回パラリンピック競技大会(The Barcelona 92 IX Paralympic Games)として開催された。特に、この大会の主催は、スペインの「オリンピック競技大会組織委員会、(Olympic Games Organizing Committee)」であり、将来のオリンピック競技大会とのインテグレーションの糸口となったのである。そして、この大会へのエントリーには、参考として標準記録も示され、脊髄損傷者、切断者等、視覚障害者、脳性麻痺者の選手が、82ヶ国から4158人集まり、アーチェリー、陸上競技、フェンシング、ローンボウル、パワーリフティング、射撃、水泳、卓球、テニスの各競技では、脊髄損傷者、切断者、そして脳性麻痺者を統合し、実施された。

第10回、アメリカ・アトランタ大会(1996年)

この大会は、IPCが主幹し、1996年アトランタパラリンピック競技大会(1996 Atlanta Paralympic Games)として開催され、脊髄損傷者、切断者等、視覚障害者、そして脳性麻痺者の選手が、102ヶ国から3218人集った。そして、この大会の参加には、オリンピック競技大会同様に、標準記録あるいはランキング何位ということに基づいた割当制度(Quota by Sport system)が取入れられ、前回の障害者の統合だけでなく、競技水準の高い大会となったのである。なお、この大会には、部分的ではあるが、INAS-FMHの精神薄弱者(知的障害者)

56人が、陸上競技(トラック種目)と水泳の種目に出場し、他の種目と同等のメダルを争うことも導入された。

3. 21世紀におけるパラリンピック競技大会の夜明け

パラリンピック競技大会は、第3回までリハビリテーション(社会復帰)の手段としての大会であったが、第4回(1972年)大会会長が、スポーツはもちろん各分野で障害者をインテグレーション(統合)することの必要性を強調した。その結果、第5回大会(1976年)から、障害者の統合がなされるようになり、切断者と視覚障害者が一同に会するようになるのである。そして、この傾向は助長され、第6回大会では、更に、脳性麻痺者が加わり、障害者のインテグレーションが進展していくのである。

このことは、当該の各障害者スポーツ組織(ISMWSF, ISOD, CP-ISRA)の自立性のあることの証しでもあり、そこに内在する障害者自身の高いアイデンティティ(同一性)を伺わせるものである。それ故、各組織は、有機的に結合していくことを目指すことが出来、前述のICCが誕生したのである。

このような傾向は、ますます発展し、第7回大会(1984年)以降、障害者自身が、障害分類の適用を外し、障害別にこだわらないオープン化を導入し、今までの残された機能、保有する機能によって分類し、障害分類別に競い合うという形式から、獲得した技能を加え、能力別に競い合うという形の真の競争が実現することになったのである。

このように、真に競い合うということは、金、銀、銅のメダルは、単に与えられるものではなく、獲得するものであるという性格を持つものに変化し、この大会が、障害者の自己実現、そして存在価値を求める欲求を満たすことに役立つものとなってきているのである。

そして、ICCが抱えていた問題、各国代表の意見が反響されにくいことなどを解消し、オリンピック競技大会を頂点とするスポーツの一元化^{14,18)}を願って、ICCの組織を解体し、1989年、IPCが誕生することになったのである(図2)。

ところで、このパラリンピック競技大会は、前述したように、IPCが誕生することで、インテグレーションあるいはメインストリーミング、そし

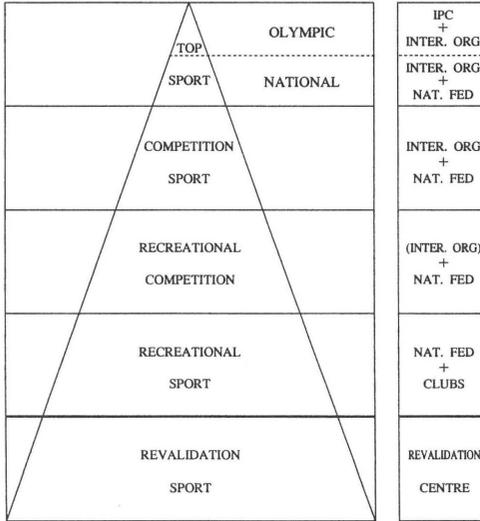


図2 FUTURE OF THE SPORT FOR THE DISABLED
(Raes¹⁸から引用)

てインクルージョンを指向する大会になっているのである。

ちなみに、リハビリテーションは、1920年前後に、障害者(切断者や盲人等の傷夷軍人)の社会復帰を考え、人間本来の生活空間での生活を保障しようとする理念とそのための技術を内包する言葉として用いられ、我が国では、当初、更生指導と訳され、使われていたものである²⁰⁾。

リハビリテーションという考え方が広く世界に滲透した頃、1950年代になると、学習障害者など行動・情緒の異常を呈する人達の社会的役割、言い換えれば、生活の質とか生活のあり方に対する権利を求める声、ノーマライゼーションが高まって来るのである²⁾。そしてこのことは、スポーツやレクリエーションについても、生活の質あるいは生活のあり方の一部として追及されるようになり、国連は、1993年、「障害者の機会均等化に関する基準規則」²³⁾を採択し、その中でも、規則11として「レクリエーションとスポーツ」を位置づけるまでになったのである。そして、我が国でも、1995年、総理府は、「障害者プラン～ノーマライゼーション7か年戦略～」を定め、「障害者スポーツ、芸術・文化活動の振興等」の中で、障害者スポーツの振興を図ることなどを挙げ、生活の質の向上を目指しているところである。

ところで、インテグレーションは、1870年代に始まる言葉の使われ方であるが、それは、教育上の分離に対する統合として使われだし、自立した各個人・集団同志がお互いに接在的運動を介し、積極的かつ創造的に適応を図っていこうということである^{3,13)}。障害者のスポーツに限って言えば、グットマンは、当初から、権利の機会均等化を求め、統合ということを考え、「身体障害者をスポーツマンとしてオリンピック・ゲームに彼等の自由な権利に於て参加を認めること」⁹⁾として、スポーツを介した社会への再統合(復帰)を考えていたのである。そして、今も、IPCは、オリンピック競技大会に於ける障害者のスポーツ種目の分離という現状に対する統合の問題として、IOCに対しインテグレーションを求め、両者は、積極的に兼つ創造的に接在的運動を繰返しているのである²¹⁾。

更に、1970年代後半から、集団の一員でありたいという障害者のニード(欲求)は、スポーツの場面に於いても、障害を持つ競技者が、パラリンピック競技大会の選手であるだけにとどまらず、オリンピック競技大会の選手でもありたいという主流をなす集団への帰属意識へと高まり、1984年のパラリンピック競技大会でみられたように、障害の枠を外してオープン化を求めるという絆を打ち立て、共感と一体感を持ち得る力量を開発し、メインストリーミング¹⁶⁾を求める強さにまで成熟してきたのである。

そして、それは、より積極的で具体的な声となり、IPC誕生以降、障害者のための種目はオリンピック競技大会の他の種目と同等であり、同等のメダルを争う種目であるという意味で、競技スポーツにおけるインクルージョン¹⁷⁾を求める所まで高まっているのである。

4. 21世紀への課題

2000年のオーストラリア・シドニーに於けるオリンピック競技大会では、今まで、デモンストレーション種目として実施されてきた陸上競技、女子800mと男子1500mの車椅子競走が、IOCとIPCの努力により、オリンピック競技大会の正式種目に組み入れられるであろう。そして、いよいよ、パラリンピック競技大会の夜明けがやってくるのである。言い換えれば、明るい夜明けの光の中で、政治、宗教、経済、障害、性、人種の枠を越えて、パラリンピック競技大会はもちろん、オリンピッ

ク競技大会を頂点とする種々のスポーツの催が、地球上の各地で開かれるようになるのである。

そのために、今、求められているものは何であろうか。

もちろん、それは、メインストーリーミングやインクルージョンのための更なるリハビリテーションであり、ノーマリゼーションやインテグレーションである。言い換えれば、そのために、障害を持つ人々と障害を持たない人々の自立を促し、権利を保障し、人間と人間の有機的な関係を強めていく社会創りが必須である。

この事のために大切なことは、何事に於ても情報公開の必要性やインフォームドコンセプトが重要であるなどと言われているように「知」を分かち合うことであろう。つまり、「知」を分かち合うためのコミュニケーションが何よりも大切であり、パラリンピック競技大会が夜明けを迎えるに当たって大切なこと、21世紀への課題なのである¹¹⁾。

自立した障害を持つ人々と障害を持たない人々は、互いの情報を交換し、社会的役割を向上させ、選択権を保障し合い、共存共栄することが求められているのである。明るい夜明け、21世紀が待たれるところである。

引用文献

- 1) COOB '92 (1993) : PARALYMPICS '92 Foundation ONCE, Barcelona.
- 2) Emerson E (1992) : Normalisation, Roulledge, London, pp.1-18.
- 3) 藤井聡尚(1975) : 「インテグレーション」の形態と問題点. 肢体不自由教育23 : 4-11.
- 4) Glick SM (1980) : The action Group to defend the rights of the Disabled in the USSR, Annual Conference of The President's Committee on Employment of the Handicapped, Washington, D.C.
- 5) Goodman S (1986) : Spirit of Stoke Mandeville, Collins, London.
- 6) Guttman L (1976) : Textbook of Sport for the Disabled, HM+M Publisher, England.
- 7) 国際身体障害者スポーツ大会運営委員会(1964) : ローマパラリンピック報告書, 私家版, 東京.
- 8) 国際身体障害者スポーツ大会運営委員会(1965) : PARALYMPIC, 私家版, 東京.
- 9) 内藤三郎(1958) : 身体障害者の更生療育(レハビリテーション)に於けるスポーツの重要性, 私家版.
- 10) 中川一彦(1976) : 身体障害者とスポーツ, 日本体育社, 東京.
- 11) 中川一彦(1980) : 障害者とスポーツ. みんなのスポーツ2 (10) : 10-11.
- 12) 中川一彦(1986) : 脊髄損傷者とスポーツ. 理学療法3 : 51-59.
- 13) 中川一彦(1986) : 障害者のスポーツと障害児教育. リハビリテーション研究51 : 9-13.
- 14) 中川一彦(1990) : 身障者スポーツについて思うこと. われら人間54 : 4-5.
- 15) 中川一彦(1993) : 障害者と楽しいスポーツ, 全国身体障害者総合福祉センター, 東京, pp.1-20.
- 16) Pappell C P et al (小島蓉子抄訳, 1990) : メインストリームを目指すソーシャルグループワーク. リハビリテーション研究64 : 28-55.
- 17) Potter J (1994) : Adapted Physical Activity, Springer-Verleg, Tokyo, pp.257-263.
- 18) Raes A (1985) : Development programme in developing countries, Proceedings of Symposium on wheelchair sport, Paper 9.
- 19) Seoul Paralympic Organizing Committee (1989) : The 8th Seoul Paralympics OFFICIAL REPORT, 私家版, 韓国.
- 20) 砂原茂一(1980) : リハビリテーション, 岩波新書, 東京.
- 21) Steadward R (1995) : Integration and Sport in the Paralympic Movement, International Paralympic Committee General Assembly Report, Japanese Sports Association for the Disabled, Tokyo, pp.69-84.
- 22) The Committee of the XXI International Stoke Mandeville Games (1973) : 1000 Competitors 1000 Winners, Wittemann and Kupperts, West-Germany.
- 23) United Nations (1993) : Standard Rules on the Equalization of Opportunities for Person with Disabilities, (長瀬修訳 : 障害者の機会均等化に関する基準規則, 日本障害者協会, 1994).